

[大島管内の遺伝資源の収集・評価・保存]

## ブバルディア新品種の開花特性およびウイルスフリー苗の実用性評価

～母株の由来とシェード期間が第1期品種の春期の開花および形態的特性に及ぼす影響～

大橋友紀・作山美穂・小坂井宏輔\*・木下沙也佳<sup>\*2</sup>・大槻優華<sup>\*3</sup>・宮下智人<sup>\*3</sup>

(島しょセ大島・<sup>\*3</sup>園芸技術科) <sup>\*1</sup>現江戸川分場・<sup>\*2</sup>現園芸技術科

---

【要約】第1期3品種の春期の開花については、培養由来の株と非培養由来の株で収量と形態的特性は同等と考えられる。また、春期の栽培におけるシェード期間は「シルキーホワイト、クリアピンク」で7日、「パールピンク」で10日が適すると考えられる。

---

### 【目的】

2019年に出願公表されたブバルディア第1期3品種の普及や品質向上のためには、培養苗の実用性や適切な栽培管理方法を明らかにすることが重要である。本試験では、各品種について、母株の培養の有無およびシェード期間が春期における開花及び形態的特性に及ぼす影響を明らかにする。

### 【方法】

第1期3品種「東京スター（以下、略）シルキーホワイト、パールピンク、クリアピンク」を供試した。培養苗（B1：ホルモン濃度高）および大島事業所で維持していた非培養苗を母株に用いた2区を設け、各母株から採穂した挿し木苗を2022年3月に定植した。なお、前年度まで培養苗はB1とB3（ホルモン濃度：低）の2区であったが、両区に差がなかったため、以降の試験はB1のみとした。シェードは遮光用フィルム（トーカンホワイトシルバー）を使用し、16:30～8:30の時間帯で処理を行った。期間は7、10、14日間の3区とし、母株の区と合わせて計6区とした。1株4本仕立てを基本とし、各区8株×3反復とした。2023年5月8日からシェードを行い、収穫は概ね6月中に行った。到花日数、開花率、奇形花率等の形態的特性を品種別に調査し、分散分析と多重比較を行った。

### 【成果の概要】

- 母株の影響評価：全ての品種で開花率および形態に関する全調査項目に差がなかった（表1～3）。このことから培養由来の苗は、春期においても夏期（R4 成果情報）と同様に、非培養苗と同等の収量および形態的特性を示すと考えられた。
- シェードの影響評価：奇形花率は、「シルキーホワイト、クリアピンク」で区間差がみられたものの、全ての品種で4%以下と極めて低率であった（表1～3）。開花率はいずれの品種、区においても差はなく、同程度の収量であった。その他の項目については、「シルキーホワイト」ではいずれも差がなく、「クリアピンク」では側枝長がシェード7日で10日より長くなったものの、出荷上影響のない程度であった。「パールピンク」では花蕾数が7日で13個と少ないのに対し、10日では18個と多くなり、品質が向上した。以上より、春期のシェード期間は、「シルキーホワイト、クリアピンク」では7日、「パールピンク」では10日が適すると考えられた。

### 【残された課題・成果の活用・留意点】

- 引き続き、秋期にシェードを行い、適正なシェード期間を明らかにする。
- 仕立て方が収量に及ぼす影響を調査する。

表1 母株の由来とシェード期間が「シルキーホワイト」の開花および形態的特性に及ぼす影響

試験区		到花 <sup>b</sup> 日数	開花率 <sup>c</sup> (%)	切り花長 (cm)	節数	側枝数	側枝長 <sup>d</sup> (mm)	花房幅 (mm)	小花サイズ (mm)		花蕾数 <sup>e</sup>	奇形花率 <sup>f</sup> (%)
母株 <sup>a</sup>	シェード								花冠径	花筒長		
培養苗	7日	48	86	56	7	13	97	88	25	40	16	1.2
	10日	48	92	54	8	14	75	84	22	40	18	0.8
	14日	48	80	50	7	13	84	92	23	40	17	2.1
非培養苗	7日	47	80	57	8	14	83	86	22	40	15	0.3
	10日	48	90	59	7	13	102	87	22	41	18	1.0
	14日	48	86	47	7	14	85	90	24	39	18	4.0
統計結果												
分散分析 <sup>g</sup>	母株	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	シェード	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	**
	母株×シェード	NS	NS	NS	NS	NS	**	NS	NS	NS	NS	*
多重比較 <sup>h</sup> (シェード)	7日											a
	10日											a
	14日											b

脚注) a) 培養苗はBA1.0mg/L+NAA0.01mg/Lのホルモン濃度培地での培養した。農総研バイテクチームで培養した苗のうち、ポットでの開花調査で奇形花率が低かった個体を供試した。 b) シェード開始から開花までの期間 c) 整枝したシュートのうち開花したシュートの割合 d) 花房の下の節から伸びた側枝を測定 e) 上位3節で開花がみられた花枝にある花蕾数 f) 調査した花数のうち奇形が発生した花の割合 g) 母株とシェードとで2元配置分散分析を行った。NS:有意差なし, \*: p<0.05, \*\*: p<0.01 h) シェード間でTukey-Kramerの多重比較を行った。異なるアルファベット間で有意差あり (p<0.05)

表2 母株の由来とシェード期間が「パールピンク」の開花および形態的特性に及ぼす影響

試験区		到花 <sup>b</sup> 日数	開花率 <sup>c</sup> (%)	切り花長 (cm)	節数	側枝数	側枝長 <sup>d</sup> (mm)	花房幅 (mm)	小花サイズ (mm)		花蕾数 <sup>e</sup>	奇形花率 <sup>f</sup> (%)
母株 <sup>a</sup>	シェード								花冠径	花筒長		
培養苗	7日	45	97	51	7	15	69	81	23	34	14	0.9
	10日	45	83	53	7	16	74	83	23	35	20	0.0
	14日	45	90	43	7	13	62	87	25	35	17	0.0
非培養苗	7日	45	92	52	7	15	71	80	22	36	13	0.0
	10日	45	95	51	7	14	69	82	21	34	17	0.0
	14日	44	90	45	7	14	64	83	23	37	16	0.0
統計結果												
分散分析 <sup>g</sup>	母株	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	シェード	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	*	NS
	母株×シェード	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	*	NS	NS
多重比較 <sup>h</sup> (シェード)	7日											b
	10日											a
	14日											ab

脚注) a~h) 表1脚注参照

表3 母株の由来とシェード期間が「クリアピンク」の開花および形態的特性に及ぼす影響

試験区		到花 <sup>b</sup> 日数	開花率 <sup>c</sup> (%)	切り花長 (cm)	節数	側枝数	側枝長 <sup>d</sup> (mm)	花房幅 (mm)	小花サイズ (mm)		花蕾数 <sup>e</sup>	奇形花率 <sup>f</sup> (%)
母株 <sup>a</sup>	シェード								花冠径	花筒長		
培養苗	7日	41	96	48	7	12	72	83	16	40	21	0.0
	10日	40	94	45	6	11	73	87	34	38	29	0.4
	14日	42	98	45	7	12	79	93	15	40	30	0.0
非培養苗	7日	38	95	50	7	12	82	87	16	40	25	0.1
	10日	39	95	48	7	12	71	88	15	39	30	0.4
	14日	38	96	44	7	12	68	84	15	42	30	0.0
統計結果												
分散分析 <sup>g</sup>	母株	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	シェード	NS	NS	NS	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	**
	母株×シェード	**	NS	NS	NS	NS	**	NS	NS	NS	NS	NS
多重比較 <sup>h</sup> (シェード)	7日						a					a
	10日						b					a
	14日						ab					ab

脚注) a~h) 表1脚注参照